

今月のことば 平成21年 4月 <No.32>
人生の「おもて」と「うら」



あなたの脈の音は、いのちを削るカンナの音に他なりません。あなたのいのちも、刻々と削られて、死の方へ近づいているのであります。それをごまかさず、真っ正面から死を意識する、考えた時に初めて生というものに本当の目が開けてくるのです…。 テレビ長崎制作『道ゆきて～ある僧侶の一年～』より



これは平成十年頃、フジテレビで放送されたドキュメンタリーの一場面です。語っているのは、金子真介さん。長崎県にある禅心寺の住職です。金子さんをご自身がガンを患ったことをきっかけに、「生と死を見つめるセミナー」を立ち上げ、各地で講演活動を始めました。時には病院や教会へも出向き、「生と死」を語る姿を、カメラは追ってゆきます。

番組では、金子さんが最愛のお母様を看取られる過程も放送されました。ご臨終が近い場面にまでカメラが入り込んでの取材。そしてお母様が亡くなりそうな時、深い悲しみの中で、金子さんはそれでも講演に立ち、「生と死」を語り続けます。

枯れてゆく親の与えてくれるすばらしさとは何か。

それは、良寛（江戸時代の歌人）最後の歌、そのものであります。

うらを見せ おもてを見せて 散るもみじ ということなんです。

私ども子供は、おもてだけを見ておきたい。

きれいな所だけ、いつまでも私を背中におぶってくれた

あのままの母であって欲しい、欲しかった…。

しかし、美しいものだけではなく、目を覆いたくなるようなものもある。

その、**「おもて」も「うら」もあって、人生というものである。**

それを私どもに完全に納得させて、そして、親の役割が終わったという顔で呼吸が止まってくのではないだろうか、そんな気がいたします…。



金子さんは真光寺夫婦にとって、結婚し、お寺を守っていくにあたっての道しるべとなってくださった方です。 実際にお会いし、相談に乗ってくださいました。また平成21年の永代経法要では、真光寺に足を運び、講演をしてくださいました。金子さんの大切な「ことば」は今、真光寺住職も通夜の席でご遺族にお伝えさせていただいています。

慧日山 真光寺

